りびんぐらいぶず　令和2（2020）年4月第2号

信因称報説の弱点の打開策

◆本願成就文「一念」についての隠顕の義

この一念について隠顕（おんけん）の義あり。顕には、十念に対するとき一念といふは称名の一念なり。隠には、真因（しんいん）を決了する安心一念なり。

（Ref 存覚聖人『浄土真要鈔　本』註釈版聖典 p967

梯　實圓『親鸞教学の特色と展開』p268）

◆はじめに

信心正因　称名報恩（信因称報説）は、覚如上人によって確立された教学であり、三業惑乱で固定化され、昭和二十一年制定の宗制で見直し不可能に定められて来た。

確立の背景は、法然聖人中心主義から親鸞聖人中心主義へ、念佛往生から信心往生へと教義の力点を変えていくことが覚如上人の教学の中核にあったからである。

ところで存覚上人は、信因称報説の根拠を本願成就文の教意に求める際に法然上人の「行の一念」と親鸞聖人の「信の一念」とを隠顕の義で体系立てる方法論を導入される。

存覚上人の隠顕の義による体系化により、信因称報説が抱えてきた伝道上の課題（信心獲得とはどのような道行きか）は、解決の見通しが立つのではないかと窺われる。

◆「信心正因　称名報恩」は、「一念隠顕　信心正因」で見直す

成就文の「一念」を出拠とする以上「**信心正因　称名報恩**」は、信心/称名共に弘願の上に立つ法文であるから化身土巻にいう眞仮分別ではないのに、称名は信心獲得後の報恩感謝に位置づけられているから、どのようにして信心獲得できたのかは明らかにされてはいない。

ここで同じ一念を捉えて法然上人は「行の一念」と仰せになり、親鸞聖人は「信の一念」と仰せ下さったのであるから、存覚上人の「隠顕の義」の御指南のもとに信心獲得プロセス如何をお訊ねしてみることには、大きな可能性があると見ることができる。

存覚上人は、**顕には、十念に対するとき一念といふは称名の一念なり。隠には、真因を決了する安心一念なり。**と仰せ下さった。

そうすると、願文の十念を称える間には、終にそのときに恵まれれば、成就文の表では「一念」は、如来回向の「大行『他力の行』」となって現れて下さって居り、同時に文の裏に隠された意を訊ぬれば、疑いをさしはさまず如来回向の「他力の信」を頂戴した時となる。

お念仏の声が聞こえなくなった今日ならば尚のこと、寧ろ、法然上人の「行の一念」も一層大切に依用して、十念行のうちには、終に他力の行を賜り、そのときがそのまま「大信『他力の信』」を頂戴している時であると実践的に捉え直すことができるかと窺われる。

そうすると、「信因称報」説は、存覚上人の御指南により、称名に実践的に隠顕を導入して

一念隠顕

信心正因

と頂戴し直すことができる。「一念隠顕」とは、如来より賜りたる称名は、文の表では、声に出す称名でありつつ、文の裏は、終に如来より賜りたる真実のお心になるからである。

隠顕は、今日異教徒異民族が仏教に対して興味深く懐くメディテーションであり、称名三昧の行き着くところ、信心獲得に到る**三昧発得**であったと解することができるからである。

◆信心正因　称名讃仰

称名を衆生にも許される行いの次元で捉え直せば、**「信心正因　称名讃仰」**となる。

諸仏如来ならばこそ、お名号の素晴らしさが分るからこれを讃嘆なさる。

それをお聞かせに与って衆生は「何と尊いことよのう、まことまこと」と讃仰させて戴く。第十七願のお心である。

讃阿弥陀仏偈和讃第三十首に曇鸞大師のお徳をお称え下さったご和讃がある。

阿弥陀仏の御名を聞き、

歓喜讃仰せしむれば、

功徳の宝を具足して、

一念大利無上なり。

(Ref『讃阿弥陀仏偈和讃』第三十首、註釈版聖典 p561)

使役の助動詞「しむ」の主体は如来様である。「使役」を基本に、如来様の尊いお仕事だから「尊敬」が表に浮び上って下さるのである。

◆信心正因　称名聞名

信心獲得のプロセスアプローチ表現では**「信心正因　称名聞名」**となる。

私達はすぐには信心獲得できない。

けれども、南無阿弥陀と称えれば直ちに聞こえて下さるのは南無阿弥陀佛であり、お浄土から届いて下さるお喚び声に他ならないと聞いて聞いて聞き抜く間には、終に如来様のお喚び声だと目覚めることができる。

瓜生津隆眞先生は、妙好人木下マサさんの語録をひとつひとつひもとき、マサさんには、聞いて聞いて聞き抜いてゆかれた厳しいお聴聞があったとおっしゃった。

親鸞聖人は**「聞即信」**と仰せ下さった。

何ゆゑ**「聞即信」**と仰せ下さったか。

成就文に別の御言葉として現れる「聞」と「信」とを何ゆゑ一体のものとして採り上げる必要があったのか。

却って、正依の大経第十七願文、第十八願文には「聞」自体がなかったからか。

困難な課題ですが、不肖には、妙好人お軽さんのお歌、一蓮院秀存師のお歌から、次のように頂戴できるかと窺われます。

「信」は首肯する姿(信一念義)だから唯一たび、「聞」はプラクティスだから繰り返しを許す。その性格は矛盾概念でありながら、「聞即信」で結べば、**“静なるままに動の真理を招来したものとなる”**からではないか。

お喚び声の主は如来様、衆生はそれをお聞かせに与り、終に喚び覚まされるからである。

◆ふと仰ぎ見るお姿は一聞見一致―

ただ一度であろうとも丁寧に合掌礼拝し、「どんなご利益がありますか」と問うた青年の問に対するお答えを探し求めて三ヶ月が過ぎ去った頃、とうとう**「ふと仰ぎ見るお姿は」**という讃歌になって現れ出て下さった。

まったく「ふと」のありさまそのままに

一、ふと仰ぎみるおすがたは
すくいの御名（みな）のほとけさま
されば六字と名告（なの）らして
となえてご覧と勧めます

二、ふと仰ぎみるおすがたは
すくいの御名（みな）のほとけさま
されば私に称えさせ
耳に聞こえてよび給う。

三、ふと仰ぎみるおすがたは
すくいの御名（みな）のほとけさま
さればかさねてきかしめて
われをたのめとよびさます
なもあみだんぶ　　合掌。

◆仏教壮年会お聴聞の会六月7日(日)二十時より
◆仏教婦人会例会　六月十六日(火) 十九時半より

著作編集兼発行元(本願寺派 正覚寺内) 〒520-0501 大津市北小松四五二番地
TEL077-596-0166、FAX077-596-0196 住職 堅田 玄宥